

# 教務だより

2015年2月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 準備の時代

茗溪塾塾長 宇野 雅春

入試が始まり、悲喜こもごもの毎日が続いています。なんとか合格へ導こうとできる限りの手を尽くしていますが、やはり合格を手にするのは、準備と努力がある程度伴っている感のある生徒です。小学生なら習い事、中学生は部活動と勉強以外にもかなりの時間を割く時代です。昔は、受験の学年になったら、みんなと一緒に「受験勉強」を始めるというのが一般的であったし、学校の成績で受験校も自ずと決まったような頃もありました。

時代は大きく変わり、特にここ数年、状況の変化を痛切に感じています。つまり、自分を取り巻く狭い地域社会に限定した集団からは、「受験」のレベルが全く予想できないということです。それなりに頑張って受験してみると学校ではトップクラスの生徒でも、想像以上にレベルの高さに驚かされたりする事があります。

準備万端を積んできている集団がかなりの規模で出来あがっていて、その輪の中に入ろうと思っても全くたうちできないということが時々起こります。これは中学受験、高校受験、大学受験、就職試験、その他芸術分野の各コンクール、スポーツの世界に至るまで、昨今は深く浸透しているように思えます。目的に向けて早い時期から準備を積み重ねる「準備の時代」といってもいいかもしれません。子育ての中で考えなければいけないことは、子どもたちが夢を持って何かになりたいというときの実現に向けて、何を準備していけばよいのか？ということです。

思い立った時に既に同じ事を目指す人たちのレベルが、自分とはほど遠い高みにあって全く手が届かないことを思い知らされるだけでは、ちょっと可哀想な気がします。一番大切なことは、最初に「レベルを知る」ということ…。どのレベルを見て育つかはとても大きな成功要因のような気がします。

2015年度ガイダンスに「大学受験への準備」という特集を組みました。志望校合格 100 パーセントをシミュレーションするという内容です。もちろん合格率 100 パーセントなどというものは存在しませんから、それが確実というものではありませんが、実際に大学受験の合格実績を持っている私国公立一貫校などのカリキュラムを参考にすると、何をいつ準備しているのかが、見えてきます。

それを鵜呑みにして子供の実態を無視して、親が先行しても上手く行くはずありませんが、親としてこの「準備の時代」を把握しておくことは必要なことのように思います。私が最初に経験したのは、ピアノのコンクールです。地区予選から全国大会まで行くものですが、まだ幼い自分の子供を連れて、何度か予選会に行ったことがあります。「本選」という実質的な地区予選に出る前段階のものでしたが、レベルが高く、見た目は普通の子供でも、いざピアノに向かうと別人のように華麗な指さばきを見せる…という具合で驚きの連続でした。今や世界的なピアニストの辻井伸行さんが、小4か小5の頃参加していたといえますから、日本のピアノのレベルがどんどん世界に向かって伸びていたころだったのかもしれませんが。小学校2年生で、1日7～8時間の練習を欠かさないと聞いてびっくりしたことを覚えています。このことが私が「準備の時代」を実感した最初であったかも知れません。目標が見えたら少しずつでもそこに向けて準備を重ねていくこと。「まあいいか…」と思ってしまうことで、失ってしまうことが、たくさんあるような気がします。 どういう方向に動進みたいのか？そのために何を準備していくのか？ついこの前までは遊んでいて、受験直前で必死になっている生徒を見ると、より早い時期での動機づけの必要を痛感してしまいます。また早い段階で、あきらめてしまう子供達が多いのも、この「準備の時代」が背景にあると思います。

でも、あきらめるのはまだ早い。受験で経験したことを次に活かすことで、何らかの準備の突端につけるはず。もうすぐ受験は終わります。すぐ遊ぶのではなく、それぞれの受験を節目にして、もう一度次へ向けての「準備」を考えてみる時だと思えます。